



八十人の大家族

老人ホーム『成章園』

リポーター 佐々木 幸子(赤石沢)

魅力あふれる

老人ホーム

昨年七月に完成した養護老人ホーム「成章園」には、温泉浴場や広い集会室、ゲートボール場など、すばらしい生活空間が整えられています。

老人ホームに入所している人たちは、毎日どのような生活を送っているのか、また、新老人ホームができる以前と比較して、どんな点が変わったのかなどをリポートしてみようと、成章園を訪ねてみました。

ホームの歩み

老人ホームは今から四十年前、昭和二十五年に定員三十人で国の施設認可を受け、翌年、「大館市養老院」として谷地町に開設したそうです。昭和三十八年、老人福祉法の制定により名称を「大館市養護老人ホーム」と改め、昭和四十二年には軽井沢に移転しました。

そして平成元年、現在の秋田労災病院隣接地に移転改築し、公募により「成章園」と名づけられました。



成章園の定員は八十人で、入所者の居室が一人用(四・五畳)十室と二人用(六畳)三十五室、シヨートステイ用が二人用二室の計四十七室あります。そのほか、入所者全員が一緒に食事できる食堂や、体が弱くなった人のための静養室、さらには仏間まで設けられています。入所者の皆さんがこの仏間で、先祖や先立たれた肉親の供養をしていると聞いたとき、私は、家族から離

れて暮しているこのお年寄りたちの心情が、何となく理解できたような気持ちになりました。今までになかった宿直室もできたので、寮母さんが交代で寝泊まりし、何かあったときすぐに対応できる態勢を整えています。

成章園の一番の特徴は、温泉が引かれていることです。入浴は、入所者の皆さんが一番楽しみにしているというところで、温泉浴場はたいへん好評でした。また、秋田労災病院が隣にあるということも特徴の一つです。いざというとき、いつでも病院へ駆け込むことができますし、健康管理面においても大変役立っているそうで、寮母さんも入所者の皆さんもお互いに安心して生活をしているみたいです。

冬でも暖か

前のホームでは、反射ストーブと電気こたつ、寝るときは湯たんぽが豆炭あんかを使っていたんですが、今は全館暖房、廊下などは二十四時間暖房とのこと。

一日中暖かなおかげで、夜のトイレにもおっくうがらずに起きられるので、おもしろいなども解消されそうです。また、日中部屋にこもっている時間が少なくなり、ロビーでテレビを見たり話をしたり、集会室で各種クラブ活動をしたりと、みんなで過ごしていることが多くなったと、寮母さんはとても喜んでいました。ちなみに、一日に消費する灯油の量は、ドラム缶一・五本だそうですが、これでホームの八十人が毎日を快適に過ごせるのなら安いものでしょうね。

「ストーブに灯油を入れたり、一人ひとりの布団の中に豆炭あんかを入れたりしていたんですよ。つい昨年の冬のことに、今ではもう、大昔のことであつたような気がしてしまいますね。」と寮母さんは笑っていました。

助け合いの精神を

寮母さんたちが、普段感じていること、考えていることを伺うことができました。

「ホームに入るといふ一つの環境の変化に伴って、心身共に弱くなってから入所される人は、自分の考えたことに動作がついていけない状態になることもあります。人によって入所の理由はさまざまですが、できることから、心も体も元気なうちに入る



寮母センターで話を聞く佐々木リポーター(左)

のが一番望ましいと思います。年を取ると、思いやりの心が乏しくなっていくような気もするんです。体の弱い人を見たら、自分にできることをしてあげればいいのと思うこともしばしばです。傍観者のとでもいってしまおうか、だから何か一人ひとりが孤立しているようにも感じてしまうんですよね。」
意外なお話に少し驚きました。けれど、それがもしかしたら当然かな、自分のことに精一杯で生きてるんじゃないかなと考えてしまいました。また、最後に伺った「あなたたちは八十人家族なんだから、お互い助け合わなくちゃね。」という言葉は強く響きます。寮母さんの姿に頭の下がる思いでした。

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。